Part Ⅱ

世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが
「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文　中西あゆみ

インドネシア

バタヴィア

ジャカルタでは洪水対策として、西側と東側に2本の人工水路がつくられています。最初にこの計画が立てられてから既に100年近く。首都ジャカルタが、オランダの植民地時代の名称「バタヴィア」と呼ばれていた頃の話です。当時から洪水被害のあったバタヴィア市内に水が入ってくるのを防ぎ、街の外に流れるよう計画されましたが、基本計画が決定したのは1970年代に入ってからでした。その後西側の水路から工事が着工し、東側は2002年にようやく開始されました。東側水路にいたっては洪水被害を軽減するだけでなく、ジャカルタ市ーブカシ市間の交通量を減らすために船の運航計画もあるそうです。

その都度、幾度となく深刻な洪水被害に見舞われているジャカルタ。この「洪水放水路」自体は完成したものの、2本の水路を連結させ、市全体を一度に洪水から守るという一大事業は進んでいません。水路近くの居住地区を更地にするのに手間取っているという理由があるそうです。しかし実際は、開発のためならその土地で暮らす住人の意向を無視してでも、ある日突然工事をはじめる行政。強制撤去命令を下し、強硬手段に出ます。これまでジャカルタでは、数百万人の住人

1

がさまざまな開発や事業を理由になすすべもなく住居を失ってきました。

更地になっても工事が進まない水路沿いには、放置され続けている建設資材に続き、ゴミ山が広がっています。その並びには掘っ建て小屋で暮らす人々、拾って来た家具だけを空き地に置いてその場で暮らし続けている人たちもいます。川の水にはたくさんのゴミが浮かび、深緑色に濁っています。

東ジャカルタの「東洪水放水路」近郊に住む子どもたちは、河川敷を有効活用し、凧上げに夢中です。更地になった土地には移動式遊園地も来ます。簡易マーケットや子どもを対象にした商売がどんどん軒を連ねています。夕方になるとこの辺りは一気に賑わいます。商売をする人たちは、皆この土地の一時使用料を利権者に支払わなければなりません。一方、更地でのこのような商売は違法であると行政側は言っています。この国特有の混沌たる状況が垣間見えます。

南ジャカルタのジャガカルサ地区では、「オンデル・オンデル」というバタヴィア伝統芸能一座が各村を訪問し、踊りを披露しています。ジャカルタの北から南まで一日歩き続け、村から村を訪れる一座。大きな頭の人形をかぶり、伝統音楽に合わせ、道いっぱいに大きく体を揺らしながら踊ります。どの村でもその場は一瞬にして子どもたちであふれかえり、大きな歓声が上がります。踊りの後、一行は見物客に投げ銭用の入れものを回します。集金が終わるとまた次の村へ。一座の移動は続きます。

この国独特の伝統や文化に加え、西洋、中東、東洋から集まった多人種、異文化、多宗教が混在しながら発展してきたバタヴィア。植民地時代を経て、1942年に日本軍が占領し名をジャカルタと改め、時代はスハルト独裁政権へ突入しました。民主化した現在に至るまで、常に誰かに支配される状況は、人々を極限状態に陥らせてきました。この地で暮らすどんな階級の人々も安心して空気を吸い、きれいな水を飲み、健康で平穏な心で暮らせる時代が訪れるのはいつなのか…。経済成長が世界的に注目される現在、自国の問題に目をつぶり続けている政府が少しでも誠意のある対応をしていくことが切に望まれます。

中西あゆみ
フォトグラファー
東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。長編ドキュメンタリー映画を制作中。

1. バタヴィア伝統芸能一座を前に集まる子どもたち。南ジャカルタ。**2.**「東洪水放水路」沿いの更地につくられた移動式遊園地。 東ジャカルタ **3.** バタヴィア伝統芸能一座の踊りを見に集まる近所の人々。南ジャカルタ。 **4.**「東洪水放水路」の河川敷で凧上げをする子どもたち。東ジャカルタ **5.** 移動式遊園地内の一角で遊ぶ子どもたち。東ジャカルタ。